

障害児における遊びの指導のねらいや形態に関する一考察

里見 達也*

I. はじめに

新学習指導要領（2009年3月告示）では、総則に「各教科、道徳、特別活動及び自立活動の全部又は一部を合わせて指導を行う場合には、各教科、道徳、特別活動及び自立活動に示す内容を基に、児童又は生徒の知的障害の状態や経験等に応じて、具体的に指導内容を設定するものとする。」の規定が示された。これは、「領域・教科を合わせた指導」の教育課程上の位置づけを重要視するものである（文部科学省，2009）。

「領域・教科を合わせた指導」の中で代表的なものに「遊びの指導」がある。「遊びの指導」は、「特殊教育諸学校学習指導要領解説－養護学校（知的障害教育）編」（1983年発行）においてはじめて示された。「児童生徒の遊びの活動には、その種の各教科の内容をはじめ、道徳、特別活動及び養護・訓練などの内容が総合された形で含まれて」いるため、「養護・訓練の領域、一教科の指導として位置づけることは望ましくない」として新たに明記された（朝野，2011）。知的障害養護学校に多くの重度・重複障害の児童生徒が入学する傾向を見越して、従来の教育課程の枠組みから新たな枠組みへと変化する過程で整理されたものである。

一方、遊び研究は、象徴遊びやごっこ遊び、ルール遊びといった遊びのメカニズムを発達心理学的に解明しながら、遊びは子どもの発達にとって自然で主体的な活動であり、生活上において必要不可欠なものとして位置づけた。

しかし障害児は自発的に遊ぶことが困難で、障害の程度が重度であるほど、外部からの刺激や働きかけがなければ遊ぶことができず、その遊びについても、一つのおもちゃを使って長時間遊ぶなど人とのかかわりを媒介とした遊びが少ない（伊藤，2001）。そのため、保護者や教師など大人が意図的に企画した遊び、さらに系統的に配慮したおもちゃ教材等の準備が必要となる。ここに「遊びの指導」が重要性を帯びることとなる。さらに「遊びの指導」を行う際には、遊びの性質により遊びそのものを教える方法から遊びをきっかけとして教科学習へとつなげる方法までいくつかの指導形態があり、この違いを意識して指導を行うことが必要といえる。

そこで本研究では、障害児の遊び研究に関する論文を指導形態別に整理しながら、遊びの指導のねらいや形態について考える。

* 帝京学園短期大学

Ⅱ. 遊びの指導形態のとらえ方

遊びの指導を行う際には遊びの性質により「遊びが教える」から「遊びを教える」、「遊びで教える」といった3つの指導形態に分けられる(朝野, 2011)。「遊びが教える」は、遊びそのものが教えるもの、つまり、遊びの楽しさを実感できるように主体的に遊びきる姿勢を大切にすることである。「遊びで教える」は、遊びの中に存在している課題要素を習得するもので、生活習慣やルールなどの社会性を学習することに重点がおかれているものである。「遊びで教える」は遊びを動機づけの手段として教科学習へと導く発展性が望まれるものである。これらの異なる指導形態によって学習内容は異なり、この違いを意識して教材・教具を活用した指導を行うことが大きな課題となろう。

Ⅲ. 「障害児の遊び研究」の動向

ここでは、日本特殊教育学会における学会誌(1992～2011)並びに同学会大会発表(1992～2011)より、障害児の遊び研究に関する論文を指導形態別に整理した。

1. 「遊びが教える」研究

「遊びが教える」指導形態に該当する研究論文には、視覚障害児に紙や布など触覚素材を用いた自由遊び場면을観察し、全盲児の物への働きかけ方や遊びの種類などについて分析している研究(大内, 1992)がある。さらに自閉症児の遊びでは、他者のからだの動きを自らまねることで、自分の動きや感覚に注意が向くようになり、自分から遊びを継続していく様子が報告(浦崎, 2000)されている。これらの論文は、障害に応じた有効的な遊びの種類を分析するとともに、遊びが持続していく過程を検証している。

2. 「遊びを教える」研究

「遊びを教える」指導形態に該当する研究論文には、重度精神遅滞児にごっこ遊びのルーティンを指導する中で形成された発話行動が同じテーマの遊びにも般化していくのか検討している研究(宮崎・水村・岡田, 1994; 宮崎・木村, 1995; 宮崎・岡田・水村, 1996; 宮崎・瀬尾, 1996)がある。結果として、お店の構成や品物の展示といった視覚的な次元で別の買い物ごっこに容易に般化したことが指摘されている。同様な研究はいくつか報告(岡田・阿部・高橋・宮崎, 1993; 宮崎・岡田・阿部・高橋, 1993; 小山, 1993; 加島・池田, 1994; 湯浅・片桐・古木, 1994; 是澤・七木田, 1996; 腰川・池田, 1997)されている。さらに、ダウン症幼児を対象に、色鬼ゲームや劇遊びを通してゲームに参加するためのルーティンの獲得や役割交代の理解の発達過程を探るとともに、言語の理解や表出を

促すコミュニケーションの指導方法について検討している研究(吉村・谷口・鈴木・長崎, 1995; 宮下・吉村・長崎, 1995)がある。自閉症児に「遊び・ゲーム」ルーティンの指導を通して子ども同士の相互交渉の成立過程が検証(上村・小野里, 2011)されている。これらの研究は、遊びの中にあるルーティンの獲得や言語表出の過程を検証している。

一方、ダウン症幼児を対象に特別な手つなぎ鬼のルール of 獲得や方法について検討している研究(細川・池田, 1993)がある。また、精神遅滞を伴う自閉症児を対象に、レクリエーションスキル形成の一環として複数でのプレイを前提としたカードゲームを通して、ルール理解における問題点について指摘(澤村・小林, 1993)している。さらに発達障害児に鬼から逃げるルール理解の促進を指導目標として、必要な指導の手だてについての検討(田中・藤原, 2007)がある。これらの研究は、ルールの理解促進の過程を検証している。

重度・重複障害児を対象に学校における遊び場面を通じた要求行動の形成や広がりについて研究しているもの(村中・長澤, 1996)がある。さらに重度・重複障害児のからだや動きを題材に、子どもの自発的な動きを促す「からだ遊び」の指導について、対人的相互交渉の視点から検討(徳永, 1997; 徳永・大沼・堀, 1994)されている。知的障害児を対象に感覚遊びを通して触覚過敏といった気になる行動の変容を検証している研究(杉原・封馬, 1995)がある。また、ダウン症児と母親の遊び場面からみられる相互作用の観察から、母子関係の力動的な変容過程や言語発達の関連性、「他者の好み」への関心を促す指導についての検討(小渡・神園, 1994; 坂口・伊藤, 1998)がある。さらに健常幼児とのボールのやりとり行動を通して他者との役割交換の理解度についての検証(藍田・長崎, 1997)がある。自閉症児に遊びのルール理解を通して対人とのかかわりを育てる支援について、「手遊び」の模倣課題やままごと場面での母子相互作用の検証(丁・渡辺・久津間・水澤・板倉・藤田・仲野・長崎, 2011; 水澤・渡辺・久津間・丁・板倉・藤田・仲野・長崎, 2011)を行っている。また、ボール運びゲームを通して認知発達のプログラムによる共同活動や情動の共有の発達促進を検証(阪本・長崎, 1996; 三津本・野本・山西・生田・菟・小林・長崎, 2007)している。広汎性発達障害児に毛布ブランコやドーナツ型クッション、蛇腹式トンネルといった遊具や「相撲ゲーム」ルーティンを用いて自発的な誘いかけや勝敗理解、情動表出の促進といったコミュニケーションの発達支援の検討(神野, 1994; 三宅・伊藤, 2002)がある。買い物あそびでは、対人交渉能力及び買い物スキル能力をめざした取り組み(杉山・石井・山田, 1998)を行っている。知的障害や発達障害のある幼児に「ごっこ遊び」や「人形遊び」を通して人間関係の発達を促す過程の検証(関口, 2011; 宮井・亀田・安永・伊藤・藤野・橋本, 2011; 亀田・安永・宮井・伊藤・藤野・橋本, 2011; 安永・宮井・亀田・伊藤・藤野・橋本, 2011)がある。情緒障害学級在籍児童を対象にボールゲーム場面での「あたたかいメッセージ」について、言葉メッセージやボディメッセージ、タッチメッセージ、他者からのメッセージに対する適切な応答を4つのカテゴリーに定義し、その指導を通して対人関係スキルの獲得を目指した SST プログ

ラムの効果の検討（安川，2002）がある。これらの研究は、さまざま遊びを通してコミュニケーション手段の獲得過程を検証している。

3. 「遊びで教える」研究

「遊びで教える」指導形態に該当する研究論文に、視覚障害のある幼児・児童に「フラフープ認定証」を目標に「フラフープ運動」を実施したところ、幼児・児童にとって、それが目安となって自発的に取り組む姿勢が出てきたことを指摘している研究（七木田，2001）がある。また、自閉的傾向を有する児童を対象に好みの遊びに必要な遊具を作成するといった困難な課題の遂行時に想定される注目・模倣行動の促進要因について検討（多田・加藤，2002）されている。対象児が好きな遊びである鬼ごっこの際には、「お面の作成」という課題遂行は動機づけとなり、その結果として課題を遂行するために注目・模倣行動が促進し、課題の正反応率が増加するとともに、他の課題遂行への般化も認められたとしている。これらの論文は遊びが動機づけとなって学習意欲が高まる過程を検証している。

また、自閉性発達障害児を対象に「なぞなぞ遊び」指導の経過を通して、多くの事情が連想できる文から徐々に取捨選択ができる文、さらに必然的に一つの回答が導き出せる文へと三つのヒントを順に提示しながら継次統合機能の発達変容とその問題について明らかにする研究（山田・石井・杉山，1998）を行っている。これらの研究は、遊びを動機づけの手段と文章理解の学習へと移行していく過程を検証している。

4. 遊びそのものやその指導技法に関する研究

遊びそのものやその指導技法に関する研究論文には、脳性麻痺児を対象に家庭での遊びの実態調査を通して遊びを規定している要因の分析を行っている研究（岡田・藤田，1995）がある。また「逃げるー追いかける」といった鬼遊びの二つのルール認識に至っていない幼児に対する指導の際に系統立てた指導案作成の有効性について検討している研究（今野，1993）もある。さらに、てんかん幼児に役割遊びを通して集団指導場面での問題点と指導内容について検討している研究（杉山・松永・鈴木・石井，1994；松永・杉山・鈴木・石井，1994）や「あそびの指導」場面における集団の凝集性と指導担当者のかかわり行動について、行動空間療法の観点から検討している研究（田中，1995；後藤・金澤・帰家・後藤，1997）もある。養護学校の「遊びの指導」場面を通して教師によるストレス、つまり子どもが現在もっている人や物などの環境に働きかける力を重視する肯定的評価が実際にどのように影響するかを検討している研究（丈六・太田，1996）がある。これらの研究は、遊びの規定要因や指導者の「遊びの指導」に対するかかわり方について検証している。

また、障害児の発達段階や障害の特徴、使用遊具の関係性を明らかにした上で、今後の発達援助のあり方についての検討（大脇・滋野井・国本・友久，1994）がある。また、肢体不自由児教育における「遊びの指導」での玩具・遊具の活用を支援するための評価表を検討（石川，1992）されている。養護学校の児童に対し、ムーブメント教育プログラムアセスメントを用いて障害児の発達特性を捉え、ゴムバンドや傾斜ミニトランポリンといった運動遊びに発声・発語を併せて実践（松下・天海・中村，1998）しているものもある。重症心身障害児に遊びの中でマイクロコンピュータを適用して、言語表出や書字能力の関連性について検討（李木・船津，1994）を行っている。これらの研究は、「遊びの指導」における教材・教具や評価、指導技法の在り方について検証している。

IV. 障害児における遊びの指導のねらいや形態について

上記のように、これまでの障害児の遊び研究を整理してみると、「遊びを教える」指導形態に該当する研究が圧倒的に多い。障害児は自発的に遊ぶことが困難で、遊びそのものも、人とのかかわりを媒介とした遊びが少ないという指摘（池田，1995）からも裏づけられよう。そのため、保護者や教師など大人は意図的に生活習慣やルールなど社会性を育てる学習課題をねらいとして盛り込む。以上のことから、障害児にとって「遊びを教える」指導形態の研究が重要視されていると考えられる。一方、従来から子どもの遊びは生活の基盤であり、らせん状に緩やかな発達を続けていくことが指摘（Piaget, J., 1962 ; Vygotsky, L. S., 1976）されている。障害児の場合、一つの遊びに留まり、次への遊びへ移行することがなかなか困難な状態が予想されると指摘（里見，1993）している。そのため、遊びの指導も発達に応じて、同様な発達過程の遊びの種類を幅広く提供しながら、らせん状に緩やかな指導形態が望まれる。

この障害児の遊びの指導を発達の側面からとらえ直すと、次のような指導形態が想定できる（図1参照）。

遊びは子どもにとって生活の基盤であることを前提に、保護者や教師は、あそびの楽しさそのものやその遊びを自発的に学ぶ姿勢を育てるねらいから「あそびが教える」指導形態を心がける。次に、遊びの中に生活習慣やルールなどの社会性を習得するために「あそびを教える」指導形態に移行する。最後に、遊びを手段として活用しながら教科学習に発展できる「あそびで教える」指導形態へ展開していく。さらに遊びが移行してく際、特に障害児の場合には、一つの遊びに固執する傾向が予想されるため、らせん状に行きつ戻りつしながら、幅広く緩やかな指導形態が求められる。

今後は、これらの障害児における遊びの指導形態を踏まえ、あそびの発達段階に応じた指導実践の研究が求められるであろう。

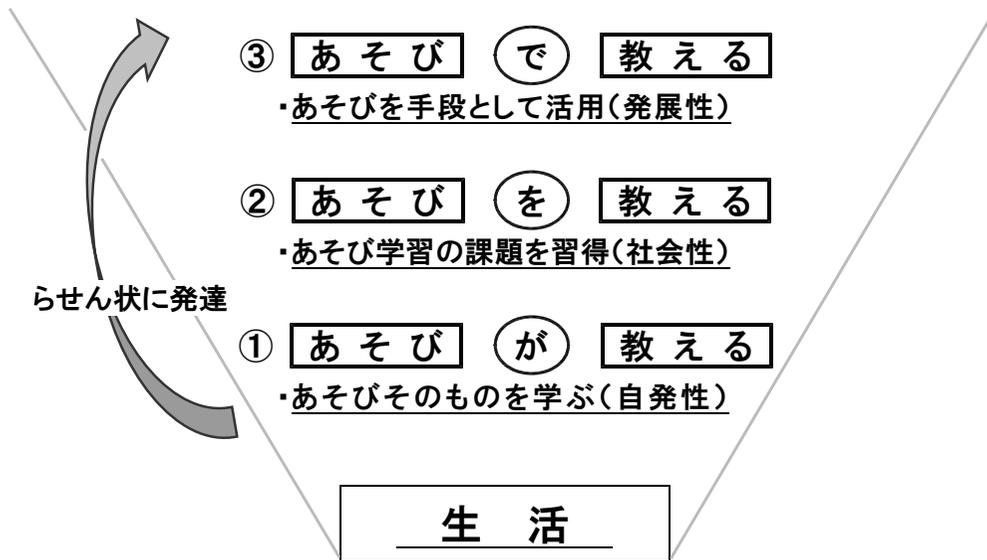


図1 「あそびの指導形態の想定図」

引用・参考文献

- 1) Piaget, J. (1962) Play, dreams, and imitation in childhood. Norton, New York.
- 2) Vygotsky, L. S. (1976) 柴田義松・森岡修一訳, 児童心理学講義. 明治図書.
- 3) 藍田幸子・長崎勤 (1997) 健常幼児とダウン症幼児における他者役割理解の発達について－10～22ヶ月児のボールのやりとり行動の分析を通して－. 日本特殊教育学会第35回大会発表論文集, 338 - 339.
- 4) 朝野浩 (2011) 領域・教科を合わせた指導－遊びの指導－. 特別支援教育研究, 646, 32 - 35.
- 5) 池田由紀江 (1995) 知的障害児の発達と遊び指導. 日本特殊教育学会第33回大会発表論文集, 81.
- 6) 石川紀宏 (1992) 『遊びの指導』における玩具・遊具の活用を支援するための評価表の作成. 日本特殊教育学会第30回大会発表論文集, 144 - 145.
- 7) 伊藤良子 (2001) 自閉症児の遊びの特徴と指導方法に関する研究動向とその課題. 特殊教育学研究, 39 (3), 43 - 51.
- 8) 上村誠也・小野里美帆 (2011) 自閉症児の子ども同士における相互交渉の成立過程－「遊び・ゲーム」ルーティンの指導を通して－. 日本特殊教育学会第49回大会発表論文集, 579.
- 9) 浦崎武 (2000) 自閉症児における「能動－受動」のやりとりの発達的変容－遊びを通して関係性の成立に焦点を当てて－. 特殊教育学研究, 37 (5), 17 - 26.

- 10) 大内進（1992）自然物を用いた遊びによる学習－視覚障害児における生活科教育の基礎的研究－. 日本特殊教育学会第30回大会発表論文集, 8 - 9.
- 11) 大脇万起子・滋野井一博・国本麗子・友久久雄（1994）障害児の発達と運動遊具について. 日本特殊教育学会第32回大会発表論文集, 804 - 805.
- 12) 岡田佳世美・阿部敏昭・高橋由美子・宮崎真（1993）精神遅滞児に対するごっこ遊び場面における言語指導 I. 日本特殊教育学会第31回大会発表論文集, 356 - 357.
- 13) 岡田節子・藤田和弘（1995）感覚運動段階にある脳性麻痺児の遊び行動と関連要因の分析. 日本特殊教育学会第33回大会発表論文集, 856 - 857.
- 14) 加島一憲・池田由紀江（1994）精神遅滞児の象徴遊びに関する事例的検討－遊びをスク립トの観点でとらえた立場から－. 日本特殊教育学会第32回大会発表論文集, 892 - 893.
- 15) 亀田隼人・安永啓司・宮井清香・伊藤良子・藤野博・橋本創一（2011）知的障害や発達障害のある幼児の人間関係の発達を促す遊びの研究－（その2）「人形遊び」を用いた鬼ごっこスキルの形成－. 日本特殊教育学会第49回大会発表論文集, 710.
- 16) 神野幸雄（1994）ダウン症幼児の言語発達（1）－やりとり遊び場面における自己－他者意識と言語発達の関連性について－. 日本特殊教育学会第32回大会発表論文集, 178 - 179.
- 17) 腰川一恵・池田由紀江（1997）ダウン症児の象徴遊びの発達に関する横断的検討－「料理－食べる」場面における象徴遊び行動と行動連鎖の観点から－. 日本特殊教育学会第35回大会発表論文集, 226 - 227.
- 18) 後藤恵美子・金澤克美・帰家大佑・後藤守（1997）行動空間療法の体系化に関する基礎的研究（V）－「あそびの指導」場面における集団の凝集性と指導担当者のかかわり行動－. 日本特殊教育学会第35回大会発表論文集, 796 - 797.
- 19) 小山正（1993）発達遅滞児の早期療育への象徴遊びの適用をめぐる（1）－言語獲得期にある発達遅滞児の療育において象徴遊びの場を設定することの意義－. 日本特殊教育学会第31回大会発表論文集, 360 - 361.
- 20) 是澤典子・七木田敦（1996）ダウン症児における象徴遊びと言語の発達的变化に関する研究－親子間の相互作用分析－. 日本特殊教育学会第34回大会発表論文集, 854 - 855.
- 21) 小渡弥生・神園幸郎（1994）ダウン症児の母子相互作用の発達的变化－遊び場面の観察を通して－. 日本特殊教育学会第32回大会発表論文集, 904 - 905.
- 22) 今野和夫（1993）精神遅滞児に対する鬼遊びの指導の試み. 日本特殊教育学会第31回大会発表論文集, 266 - 267.
- 23) 坂口博美・伊藤良子（1998）発達障害児に対する遊び指導における大人の関わり. 日本特殊教育学会第36回大会発表論文集, 400 - 401.
- 24) 阪本清美・長崎勤（1996）自閉症児に対するゲームを用いた言語・コミュニケーション

- ン指導に関する検討－「ボーリングゲーム」の指導を通して－. 日本特殊教育学会第34回大会発表論文集, 458 - 459.
- 25) 里見達也 (1993) 知的障害児のあそび発達論－エリコニンのあそび論からみた一考察－. 日本特殊教育学会第31回大会発表論文集, 270 - 271.
- 26) 澤村まみ・小林重雄 (1993) 精神遅滞を伴う自閉症児へのゲーム指導について. 日本特殊教育学会第31回大会発表論文集, 254 - 255.
- 27) 丈六哲男・太田俊己 (1996) 個に応じた指導における肯定的 (strength) 評価の影響－養護学校における遊びの指導を通して－. 日本特殊教育学会第34回大会発表論文集, 154 - 155.
- 28) 杉原敬三・封馬一倫 (1995) 気になる行動の改善をめざして－触覚に視点をあてた感覚遊び－. 日本特殊教育学会第33回大会発表論文集, 526 - 527.
- 29) 杉山修・石井正春・山田美和 (1998) 自閉性発達障害児への多面的治療教育[XIV]－その3. 買い物あそびを利用した対人交渉能力及び買い物スキル能力をめざした取り組み. 日本特殊教育学会第36回大会発表論文集, 434 - 435.
- 30) 杉山修・松永雅代・鈴木安幸・石井正春 (1994) 役割遊びを中心としたてんかん幼児の集団指導について－その1. 知的に正常なてんかん幼児と健常幼児の遊びに関する比較検討－. 日本特殊教育学会第32回大会発表論文集, 518 - 519.
- 31) 関口真理子 (2011) 軽度発達障害幼児の構造的ごっこ遊び (3) ごっこ遊びの広がりとの過程と他者認識の芽生えを中心に－. 日本特殊教育学会第49回大会発表論文集, 243.
- 32) 多田昌代・加藤元繁 (2002) 自閉的傾向を有する児童の困難課題遂行時のモデルに対する注目・模倣行動を促進する要因を検討－好みの遊びに必要な遊具の作成が及ぼす効果を中心に－. 特殊教育学研究, 40 (4), 401 - 410.
- 33) 田中真実子・藤原義博 (2007) 鬼ごっこを通じた発達障害児のルール理解の促進に関する研究. 日本特殊教育学会第45回大会発表論文集, 613.
- 34) 田中真理 (1995) 精神遅滞児の遊び場面における課題・他者との関係性. 日本特殊教育学会第33回大会発表論文集, 328 - 329.
- 35) 丁ミンヨン・渡辺春奈・久津間佑貴・水澤実栄子・板倉達哉・藤田麻衣・仲野真史・長崎勤 (2011) SCERTS モデルによる自閉症児の早期発達支援 (5) － SAP に基づいた「手遊び」課題を通じた模倣指導－. 日本特殊教育学会第49回大会発表論文集, 648.
- 36) 徳永豊 (1997) 重度・重複障害児に対する「からだ遊び」の指導 (2) －自己他者の区別と対人関係の成立をめざして－. 日本特殊教育学会第35回大会発表論文集, 284 - 285.
- 37) 徳永豊・大沼直樹・堀郁子 (1994) 重度・重複障害児に対する「からだ遊び」の指導－動きや姿勢の改善と対人関係の成立をめざして－. 日本特殊教育学会第32回大会発

- 表論文集，678 - 679.
- 38) 七木田方美（2001）視覚障害のある幼児・児童のための運動遊びの取り組み－「フラフープ認定証」の作成－. 特殊教育学研究, 38 (5), 35 - 43.
 - 39) 細川かおり・池田由紀江（1993）ダウン症幼児の遊びにおけるルールの獲得過程－手つなぎおにの指導と分析－. 日本特殊教育学会第31回大会発表論文集, 268 - 269.
 - 40) 松下清子・天海丈久・中村修（1998）障害児の発達特性と運動遊びの工夫. 日本特殊教育学会第36回大会発表論文集, 190 - 191.
 - 41) 松永雅代・杉山修・鈴木安幸・石井正春（1994）役割遊びを中心としたてんかん幼児の集団指導について－その2. てんかん発作が抑制されている幼児に対する指導経過の検討－. 日本特殊教育学会第32回大会発表論文集, 520 - 521.
 - 42) 水澤実栄子・渡辺春奈・久津間佑貴・丁ミンヨン・板倉達哉・藤田麻衣・仲野真史・長崎勤（2011）SCERTS モデルによる自閉症児の早期発達支援（7）－ままごと場面における母子相互作用，家庭での情動調整の変化，および SAP - O による評価－. 日本特殊教育学会第49回大会発表論文集, 649.
 - 43) 三ツ本厚子・野本有紀・山西朋・生田みこ・薮典子・小林麻里・長崎勤（2007）自閉症児への社会的認知発達支援プログラム（2）－ボール運びゲームによる協同活動・情動の共有の発達支援. 日本特殊教育学会第45回大会発表論文集, 285.
 - 44) 宮井清香・亀田隼人・安永啓司・伊藤良子・藤野博・橋本創一（2011）知的障害や発達障害のある幼児の人間関係の発達を促す遊びの研究－（その1）人形遊びの授業における評価と支援の方法を中心に－. 日本特殊教育学会第49回大会発表論文集, 709.
 - 45) 三宅康将・伊藤良子（2002）発達障害児のコミュニケーション指導における情動的交流遊びの役割. 特殊教育学研究, 39 (5), 1 - 8.
 - 46) 宮崎真・岡田佳世美・水村和子（1996）ごっこ遊び場面における重度精神遅滞児のコミュニケーション行動の指導－同じテーマの遊びへの般化への検討－. 特殊教育学研究, 33 (5), 79 - 85.
 - 47) 宮崎真・岡田佳世美・阿部敏昭・高橋由美子（1993）精神遅滞児に対するごっこ遊び場面における言語指導Ⅱ. 日本特殊教育学会第31回大会発表論文集, 358 - 359.
 - 48) 宮崎真・木村淳子（1995）ごっこ遊び場面における精神遅滞児に対する言語指導の検討 その3. 日本特殊教育学会第33回大会発表論文集, 286 - 287.
 - 49) 宮崎真・瀬尾由里子（1996）ごっこ遊び場面における言語指導その4－別のテーマのごっこ遊びへの般化の検討－. 日本特殊教育学会第34回大会発表論文集, 852 - 853.
 - 50) 宮崎真・水村和子・岡田佳世美（1994）精神遅滞児に対するごっこ遊び場面における言語指導 その2. 日本特殊教育学会第32回大会発表論文集, 890 - 891.
 - 51) 宮下京子・吉村由紀子・長崎勤（1995）劇遊び共同行為ルーティーンを用いた言語指導の試み－ダウン症幼児に対するこどばの教室での小集団指導－. 日本特殊教育学会第33回大会発表論文集, 652 - 653.

- 52) 村中智彦・長澤泰子（1996）重度精神遅滞児の要求行動の形成とその広がり－自由遊びを中心に－. 日本特殊教育学会第34回大会発表論文集, 224 - 225.
- 53) 文部科学省（2009）第1章総則第2節教育課程の編成第2内容等の取扱いに関する共通の事項. 特別支援学校小学部・中学部学習指導要領, 文部科学省, 4.
- 54) 安川直史（2002）情緒障害学級における SST プログラムの検討－ボールゲーム場面での「あたたかいメッセージ」の指導を通して－. 特殊教育学研究, 40（1）, 61 - 69.
- 55) 安永啓司・宮井清香・亀田隼人・伊藤良子・藤野博・橋本創一（2011）知的障害や発達障害のある幼児の人間関係の発達を促す遊びの研究－（その3）事例から見た2年間の人形遊びの授業プログラムの成果－. 日本特殊教育学会第49回大会発表論文集, 711.
- 56) 山田美和・石井正春・杉山修（1998）自閉性発達障害児への多面的治療教育[VIV]－その2「なぞなぞ遊び」を通した三つの関係への理解. 日本特殊教育学会第36回大会発表論文集, 432 - 433.
- 57) 湯浅孝男・片桐勝也・古木明美（1994）発達障害児における手遊びの発達. 日本特殊教育学会第32回大会発表論文集, 888 - 889.
- 58) 吉村由紀子・谷ロー子・鈴木はるみ・長崎勤（1995）幼児におけるゲームルーティーンを用いたコミュニケーション指導－「オオカミと子ぶたゲーム（色おに）」のルールの理解を中心に－. 日本特殊教育学会第33回大会発表論文集, 650 - 651.
- 59) 李木明憲・船津守久（1994）重度障害児に対するマイクロコンピュータの適用について（Ⅲ）－遊びの中での利用－. 日本特殊教育学会第32回大会発表論文集, 670 - 671.